

## 環境・農業生産・記録管理：文書史料に基づくエジプト環境史の構築



セソトリス2世(位 前1897—前1878)のピラミッドとラーフーン村北部に広がる農地。近代まで使われていた煉瓦造りの「土手」の上から撮影した。この景観は、この地域に歴史の層が積み重ねられてきたことをよく表している。

2013年、熊倉撮影。

## 特集に寄せて

本研究プロジェクトは、エジプトの社会経済史に関心をもち、文書史料に基づく研究を行ってきた高橋亮介(ギリシア・ローマ期)、亀谷学(イスラーム初期)、熊倉和歌子(中近世)の3名による共同研究である。このプロジェクトは、ナイルの水位や気候の変化といった自然環境に関する側面、いわゆる「長期持続(longue durée)」を分析対象に加え、各時代の社会経済的な事象をより長期的な歴史展開の中に位置づけることを目指す。この課題に取り組むために我々が注目したのが、グローバル・ヒストリーの視座の一つとして注目されている環境史である<sup>1</sup>。

西アジア地域を対象にした環境史研究は、近年ようやく各地域、時代の研究者たちが足並みをそろえてきた状況であり、まだ十分には整備されていない状況にある<sup>2</sup>。エジプトについて言えば、管見のかぎり、環境史研究に不可欠な時代横断的

な研究を可能にする共通のプラットフォームはつくられておらず、各時代の研究のなかに、環境に留意したものがあつたとしても、それを知る機会自体を得ることが難しいのが現状である。

このような時代を境界とした研究の分断は、大学における講座の違いに根ざしていると言える。「エジプト史」の場合は、ファラオが権力を握った古代エジプト時代、それに続くプトレマイオス朝や、ローマ帝国支配下の時代は「考古学」、あるいは「西洋史」に分類される一方、西暦7世紀以降にイスラーム勢力がエジプトを支配した後は「東洋史」に分類されてきた。そのため、同じ地域の歴史であるにもかかわらず、かなり異なる分野として認識され、研究が進められてきた。この分断については、欧米、あるいは現地であるエジプトにおいても、大きな障壁として存在している。

幸いにも、日本のエジプト史研究においては、

このような分断は大学における講座のレベルにとどまり、少なくとも研究者のあいだでは、時代や分野を越えて、かなり具体的なレベルでの議論の蓄積がある<sup>3</sup>。今回、同様の問題意識と、社会経済史的関心を共有して、3名のエジプト史研究者が集うことになったのであるが、それは偶然の産物ではなく、日本のエジプト史研究において醸成されていた学際的な雰囲気到我々が触発された結果であろう。

本プロジェクトは、環境変動と農業生産の相互作用を探り、そこに現れる変化が国家による記録やその管理のあり方にどのような影響を与えたかという課題に取り組む。そのさいに我々が重視するのは、自然科学の諸分野から発信される知と歴史学における社会経済史研究の接合である。歴史学の分野からその関係構築に貢献するためには、一次史料に基づく具体的な研究を発信していくことが重要となる。そこで、我々は、対象とする時代を前3世紀ギリシア・ローマ期から17世紀オスマン朝期までとし、史料が比較的豊富なファイユーム地方に焦点を当てて、上記の課題に取り組んでいくことにした。



【図1】ファイユームの位置  
Map Data: Google Earth, Landsat/ Copernicus

ファイユーム地方はカイロから南に100キロメートル、西に25キロメートルのところにある盆地である【図1】。ナイルの支流であるユースフ運河が行き着く現在のカールーン湖の湖底は海拔はマイナス30メートル、そこからおよそ35キロ離れた、ファイユームの玄関口に位置するラーフーン村周辺との高低差は50から60メートルである<sup>4</sup>。紀元前3世紀頃、プトレマイオス朝 (B.C 306-B.C 30) 時代にこの地域の開拓が始まって以来、この傾斜を利用してユースフ運河から大小の枝運河が掘られてきた<sup>5</sup>。

従来の研究において、ファイユームは「特殊な」地域と考えられてきた。その理由として第一にあげられるのは、灌漑方法である。ナイル峡谷からデルタにいたる広い範囲において、ナイル川流域は「ベイスン灌漑」と呼ばれる方法によって灌漑が行なわれていたとされる【図2】。それは、夏季に水位が増したナイルの水を、土手で仕切った耕地に引き入れ、40日間程度湛水させるというものであった<sup>6</sup>。したがって、この方法で灌漑されていた地域においては、夏作物の栽培は限定的であり、主要な農作物は小麦や大麦、アマなどの冬作物であったと考えられている。他方、ファイユームの場合、ほとんどの耕地は、ユースフ運河から分枝した水路からの揚水によって灌漑され、ベイスン灌漑地域では難しい夏作物や果樹の栽培が盛んに行われていたことが史料において確認できる<sup>7</sup>。



【図2】デルタにおけるベイスン灌漑地域  
Richards 1982: 16を参照して作成



ラーフーン村近くにある水門。マムルーク朝スルターン、バイバルス(位1260-77)の時代に設置されたとされる。  
2013年、熊倉撮影。



現在、揚水機は機械式ポンプに置き換わってしまったが、かつてはファイユームには多くの水車が設置されていた。  
2013年、熊倉撮影。

しかし、環境を分析対象の一つとするのであれば、このような紋切り型の理解は今一度見直されるべきであろう。ユースフ運河がファイユームの唯一の水道であることを考慮すれば、ファイユームの灌漑や農業がナイルの水位変動の影響を大きく受けたことは容易に推測できる。また、カールーン湖に流れ込んだ排水は蒸発によってのみ失われることを考慮すれば、ファイユームへの過度な給水はカールーン湖の水位上昇と沿岸部への逆流、そしてその結果として塩害を引き起こしたであろうことも想像することができる。このようなミクロな問題を見逃さずに検証していくことが、本研究において重要となる<sup>8)</sup>。

本研究プロジェクトは、今年度で2年度目を迎えた。この間、メンバーは、それぞれの時代の社会経済史の課題の洗い出し、環境史研究の近況の把握、利用可能な一次史料の蒐集を行い、3ヶ月に1度のペースで研究会を開催し、情報共有に努めた。この作業に近道はなく、未だに目標の達成には程遠い状況ではあるが、2年間の共同研究から得られた知見や課題を発信し、フィードバックを得ることで、さらなる原動力を得られることを期待して、本特集を組むことにした所存である。

このような経緯で本特集を執筆していたとこ



ユースフ運河で食器を洗う村人たち。運河は、農業だけでなく、生活全般において不可欠なものとなっている。  
2013年、熊倉撮影。

ろ、長年中世ファイユームの研究に取り組んできたY. ラポポルトが、これまでの研究に新たな知見を盛り込む形で、ファイユームに関する2冊の研究書を刊行する予定であるとの情報を寄せてくれた<sup>9)</sup>。今後は、国内外を問わず、同じ関心を持つ歴史研究者や異なる分野の研究者と連携して、さまざまな視野を組み合わせながら考察を行っていくことが、本研究を進めていくうえで不可欠となるであろう。

本研究プロジェクトは、科学研究費補助金挑戦的萌芽研究(研究課題15K12930、2015年4月から2017年3月まで)とJFE21世紀財団アジア歴史研究助成(2017年1月から2017年12月までを予定)の助成を受けた。



放牧をする人々。ラーフーン村付近にて。2013年、熊倉撮影。

#### 註

- 1 環境史については、昨今、洋書も含め数多くの著作が出版されているが、ひとまず、水島 2008; idem 2016 を参照のこと。
- 2 欧米の西アジア史研究では、2013年に環境史の論集である Mikhail 2013 が刊行されるなど、A. ミハイルらを中心として、地域横断的な環境史研究を追究する動きが活発になっている。
- 3 例えば、デルタ地域の環境と文明を古代から近現代までのスパンでとらえなおそうとした共同研究プロジェクト「エジプトの都市・村落形成をめぐる文明層の解明：ナイル・デルタを中心に」(共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点早稲田大学拠点公募研究, 2011 年度-2012 年度, 代表：長谷部史彦) がある。またそのプロジェクトにも加わり、早い段階から地域の通時的理解の重要性を主張した加藤博氏と岩崎えり奈氏、環境の変化が人間の居住環境に大きな影響を与えたことを示してきた長谷川奏氏は、現在デルタ西部のプハイラ地方を対象として、水利工学、地理学、リモートセンシングの専門家らと提携しながら、環境と人間の相関関係を描こうとしており、本研究プロジェクトのメンバーもしばしばその研究に加えていただいている。これらの研究成果については、長谷部 2012; idem 2013; 長谷川 2014; idem 2016; Kato and Iwasaki 2015 などを参照。
- 4 Wolters et al. 1987.
- 5 ファイユームの歴史的背景については、Kumakura 2016 を参照のこと。
- 6 ベイスン灌漑については、Kumakura 2013 を参照。
- 7 ファイユームにおける灌漑については、Kumakura 2016 を参照。
- 8 地理学や水利工学などの自然科学系分野における研究は、ミクロな問題を提示するうえで重要となる。ファイユームについては、20 世紀にはいつてからも開発が続いたため、水利関係の研究文献は豊富にある。たとえば、Shafei 1940; idem 1960; Wolters et al. 1987 など枚挙にいとまがない。
- 9 ラポポルトの新たな研究書は、*Rural Economy and Tribal Society in Islamic Egypt* と題して、2017 年 10 月にブレボル

ス社より刊行予定である。これまで彼は、アイユーブ朝期の村落調査記録を用いて、灌漑やアラブ部族に関する論考を発表してきた。また、彼が製作したウェブサイトは、村落調査記録のデータを公開しており、中世のファイユーム研究の発展に寄与している。これらの研究やウェブサイトについては、本特集の熊倉の論考の参考文献を参照のこと。

#### 参考文献

- Kato and Iwasaki 2015: Hiroshi Kato and Erina Iwasaki, “The “Personality” of Economic Development in the Delta Region of Egypt in Modern Times: A Focus on Buheyra Governorate,” *E-Journal of Asian Network for GIS-based Historical Studies*, vol. 3, pp. 31–37.
- Kumakura 2014: Wakako Kumakura, “To Where Have the Sultan’s Banks Gone? An Attempt to Reconstruct the Irrigation System of Medieval Egypt,” *E-Journal of Asian Network for GIS-based Historical Studies*, vol. 2, pp. 11–21.
- 2016: Wakako Kumakura, “The Early Ottoman Rural Government System and Its Development in Terms of Water Administration,” *The Mamluk-Ottoman Transition: Continuity and Change in Egypt and Bilad al-Sham in the Sixteenth Century*. Bonn: V&R unipress, pp. 87–114.
- Mikhail 2013: Alan Mikhail ed. *Water on Sand: Environmental Histories of the Middle East and North Africa*. Oxford: Oxford University Press.
- Richards 1982: Alan Richards, *Agricultural Development, 1800-1980: Technical and Social Change*. Boulder, Colorado: Westview Press.
- Shafei 1940: Ali Shafei, “Faiyum Irrigation as Described by Nabulsi in 1245 A.D. with a Description of the Present System of Irrigation and a Note on Lake Moeris,” *Bulletin de la Société de Géographie d’Égypte*, vol. 20, pp. 283–287
- Shafei 1960: Ali Shafei, “Lake Moeris and Lahun Mi-wer and Ro-hun: the Great Nile Control Project Executed by the Ancient Egyptians,” *Bulletin de la Société de Géographie d’Égypte*, vol. 33, pp. 187–215.
- Wolters et al. 1987: W. Wolters, Nadi Selim Ghobrial, and M.G. Bos, “Division of Irrigation Water in the Fayoum, Egypt,” *Irrigation and Drainage Systems*, vol. 1, pp. 159–172.
- 長谷川 2014: 長谷川奏「エジプト西方デルタの景観復元——イドゥク湖南域の遺跡テリトリー——」『オリエント』, vol. 57, no. 1, pp.76–82.
- 2016: 長谷川奏「地中海、砂漠とナイルの水辺のはざままで——前身伝統と対峙した外来権力の試み——」水島司編『環境史に挑む歴史学』, 勉誠出版, pp. 308–322.
- 長谷部 2012: 長谷部史彦編著『ナイルデルタの環境と文明I』早稲田大学イスラーム地域研究機構.
- 2013: 長谷部史彦編著『ナイルデルタの環境と文明II』早稲田大学イスラーム地域研究機構.
- 水島 2008: 水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』, 山川出版社.
- 2016: 水島司編『環境史に挑む歴史学』, 勉誠出版.